慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 神秘性の構造：宗教人類学再考 |
| Sub Title | |
| Author | 吉田, 禎吾(Yoshida, Teigo) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 1987 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.27 (1987. ) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000027-0123 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 博　士（昭和60年度）

### 社会学博士

乙　第1635号　吉　田　禎　吾

神秘性の構造――宗教人類学再考――

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授
社会学研究科委員，文学博士
宮　家　　準

副査　慶應義塾大学法学部教授
社会学研究科委員，社会学博士
十　時　厳　周

副査　駒沢大学文学部教授，文学博士
佐々木　宏　幹

〔学力確認担当者〕

慶應義塾大学言語文化研究所教授
社会学研究科委員
鈴　木　孝　夫

慶應義塾大学文学部教授
仲　　康

〔論文審査の要旨〕

吉田禎吾君提出の学位請求論文『神秘性の構造――宗教人類学再考』は，宗教人類学の立場から宗教現象の本質をなす神秘性の究明を試みたものである。なお著者によると宗教人類学は広い意味での宗教とくに未開民族の宗教や民俗宗教に関する社会人類学的研究を指している。また神秘性は，聖性，不思議性，呪力性，魔性など広義の〈宗教的なもの〉を包括する概念として用いられている。

周知のようにこれ迄未開宗教の研究は宗教民族学と呼ばれていた。そして宇野円空『宗教民族学』(1929，岩波書店）をはじめ，種々の研究がなされてきた。しかしながらその多くは欧米の学説や概念の紹介または調査モノグラフに類するものである。神秘性に関しても，アニミズム，プレアニミズムなど，超自然観の紹介やこの概念をそのまま用いた調査モノグラフの類が多かった。

こうした在来の研究に対して本論文は〈神秘性〉の社会的基礎，その構造，特質，機能の究明をめざしたものである。そして著者はこの意図を闡明にするために従来の宗教民族学にかえて，国際的にも広く用いられるようになっている「宗教人類学(Anthropology of Religion)」の名を副題に用いている。

本論文の内容は，第一章「祭司とシャマン」，第二章「聖なるキノコ――幻覚性植物とシャマニズム」，第三章「儀礼と世界観」，第四章「象徴の世界」，第五章「神秘性の構造」となっている。そして各章節の記述は，神秘性に関わる具体的な問題をとりあげて著者の理論・方法・文献知識・調査経験を駆使して分析し，その構造，特質を解明するという形をとっている。そのために著者が用いた手順は，(1)宗教人類学的な問題を提示する。(2)その問題すなわち，宗教的な事物や現象の性格や特徴，構造や機能を数多くの資料に照して明らかにする。(3)異なった地域，民族における類似の問題との比較考察を行なう。(4)当該問題をめぐる人類学者の仮説，理論をとりあげて検討する。(5)この仮説・理論を踏まえつつ，著者自身の仮説を提示するというものである。

その際具体的にとりあげられている宗教人類学的な問題は，第一章では神秘性の担い手である祭司とシャマン。第二章では，神秘性そのものともいえる聖なるキノコの淵源・属性やその服用がもたらす幻覚。第三章では神秘性の行使としての治療儀礼。第四章では居住空間に見られる神秘性の表現形態，髪や葬儀の意味。そして第五章ではススキ，豆，妖怪，異人，虹，虹蛇など神秘性をもつ事象である。上記の各章のうち本論文の中核をなすのは第五章「神秘性の構造」である。そこでまずその内容を，さきにあげた著者の手順を考慮に入れて紹介しておきたい。

本章は，全体が七節から成るが，その第一節「ススキの神秘性」は南西諸島においてススキが神秘的な力をもつとされ，いろいろな文脈において儀礼的に使用される事実の紹介から始まる。そしてススキが虫よけや魔よけに用いられるとともに神霊，死霊，精霊を招き寄せるためにも使われ，両義性をもつことが指摘される。ついで死霊を呼び出せ，送り帰す「マブリワアシ」の儀礼において，ユタがススキを用いて死霊を帰したのちに，屋敷の四方，八方，各部屋に黒く焼いた豆を撒くことの意味の追求に入る。(第二節「豆とトウモロコシ」）そして豆もまた豆撒きに見られるように魔よけに用いられる一方，神への供物として使われるように，異様な呪力をもつことが，大豆，小豆などについて豊富な資料を用いて検討される。さらにこの〈豆の呪力論〉は「古代ギリシャの豆」や「新大陸における豆」へと拡大される。この間に著者は，R．ニーダム，C．レヴィ＝ストロース，M．ドティエンヌなどの当該トピックスをめぐる解釈論的仮

説を採用し，(1)豆の両義性は，この世とあの世との交流をはかる媒体として作用し，ある時は善なる積極的肯定的意味を含み，ある時は悪なる否定的な意味を含むことになったと言えるかも知れない。(2)豆科の植物は多くの民族において，呪力，神秘性，両義性を付与されており，豆の呪力の観念は日本に固有のものではなく，普遍的であるとの，自らの仮説を提示する。

第三節「神秘の現象，神秘の生物」は，日本の「狐の嫁入り」の紹介からはじまる。それは，日がさしているのに雨が降る天気雨ないし日照り雨の現象である。もっともこの現象は，マレーでは「日照り雨は，悪魔に襲われやすい危険なとき」とされ，インドネシアのバリ島では「ムムディ（一種の化物）が骨を探すとき」とされ，スペインでは「魔女の太陽」と呼ばれ，フランスでは「悪魔が女房を殴り娘を嫁にやるとき」とされるように世界各地に認められている。

著者はこうした事実をあげたうえで，日照り雨が異常視されるのは，晴天と雨天という分類されたカテゴリーの変則性（anomaly）の認識に関係していると捉え，特定の現象や生物が変則的，両義的性格をもつとされる場合，それらが神秘性，魔性を帯び，タブーや穢れの対象になるとの解釈を示す。

この〈変則性・両義性⟷神秘性・魔性〉の関係図式は第四節，妖怪のイメージでは，変則的な半人，半人半獣の両義・性格を持つ鬼，天狗を例にとって論じられ，これらが出現する場所も，村境，辻，浜辺，山すそなど両義的な空間であることが注目される。さらに第五節，異人では，他国から来る異人，漂着した水死人などが神秘性を持つことが指摘されている。また第六節「神秘的な虹」では，虹が天と地の間の船や橋，あるいは大蛇の身体とされていること，この蛇になぞらえた虹蛇が両性具有であいまいな性格を持つことが指摘される。そして第七節，「霊力の由来」では，蛇そのものにふれて，蛇が霊界との媒介をはかるシャマンの化身であり，陸，川，池にすみ，大空の雷ともむすびつく媒介性，両義性を示すが故に神秘性を持つとされている。

以上が本論文に於いて特に「神秘性の構造」についてふれた，第五章の論述のうちで注目すべき点である。この他にも本論文では，直接神秘性の構造とは関係しないまでも，従来の研究とは異なった新しい解釈が随所になされている。そこで第一章から第四章におけるこうした新知見をあげておきたい。第一章「祭司とシャマン」ではシャマンに関してすぐれた洞察が示されている。とくに英国系の社会人類学において，アフリカのシャマン的人物をシャマンと呼ばずに霊媒と呼ぶことに関して，「両者の違いは程度の違いで質の違いではなく，実際に両者の区別は困難である」と，その概念のあいまいさが指摘されている。第二章「聖なるキノコ」では，シャマンが幻覚をえる為にキノコを服用することは，数千年前の北アジアのシャマニズムに由来するもので，M.エリアーデが指摘するように新しい現象ではないとしている点，こうして得られる幻覚も結局は人間の過去の経験によって規制されるもので，その経験の内容は，人間に認識される限りでの自然，人工物・物質文化，社会関係の三つであるとの指摘などが注目される。

第三章「儀礼と世界観」では，神秘性の問題及び方法論に関して事例に即した興味深い指摘がなされている。すなわち著者の調査によると，南米のチャムラでは各家の東側にクルス（十字架）が，部落の祭祀センターである聖山の頂上には松とゼラニュウムを結びつけた六本の大きなクルスが建てられている。これらに関して，各家のクルスは，人間と霊界との媒介物で，自然と文化の境界を示し，聖山のクルスに結びつけられた松とゼラニュウムは，宇宙の均衡を維持させる意味を持つとの仮説が提示されている。ここでは各家のクルスはその境界性，結びつけられたものは，その統合性，均衡維持の力の故に神秘性を持つとされている。またこのように土着のマヤ宗教にキリスト教がとり込まれている状況を分析する際には，人類学でよく用いるシンクレティズムの概念は曖昧であるとし，むしろ，E.Z.ヴォートの包含過程(encapsulation）の概念の方が妥当であるとしている点も興味をそそられる。次に第四章では，バリ島において，人間の死後まず埋葬し，その数年後墓を掘りおこして遺体を火葬にする二次葬の制度がある事を指摘し，これを死体を浄化するためのものとしていることも注目される。

このように本論文は，「神秘性の構造」の究明を最終目的としながらも，その論述が多岐にわたっている事もあって，随所にすぐれた独自の見解がもりこまれている。ただ本論文全体を通じて著者が解明した神秘性の特質，その為の解釈や方法上の特異性は，以下の四点に要約することが出来る。

1. 神秘性，聖性，魔性などの宗教的な特質や性格の条件は，人間，事物，自然などに見られる境界性，両義性，媒介性と深く関係している。また宗教的，神話的あるいは象徴的思考の本質は，コンテクストによって最も聖なるものが，最も穢なるものに転じ，悪なるものが善なるものに変じるというように，対比されるものとの関

係性，脈絡性にある。それ故二元論的な世界観が明白な社会においても，重要とされるのは，二元的な対立そのものではなく，両者の相補的関係にある。

2. 著者は本論文に於いては，神秘性を解明するための資料として地球上の隔った地域における類似した文化要素や文化形態を適宜にとりあげて，比較検討することを試みている。こうした文化要素の類似性に関する在来の説明には，伝播論と独立発生論があるが，著者はR.ニーダムの説に従って，その文化要素，形態の分布自体，それに内在する魅力，想像力の傾向を示すものであって，「伝播論も発生論も結局は同じことを言っていることになる」との視点に立って，比較研究を進めている。もっとも，著者が比較の為の素材としてとりあげた資料は，著者自身のものも含めて，いずれも特定社会の詳細な民族誌のものである。それ故たとえ異なる文化にまたがる文化要素の比較研究であっても，その比較はそれがおかれた脈絡をふまえての新しい比較研究なのであり，このことがこれ迄示してきた数多くの新しい知見をもたらしているのである。

3. 著者は複雑な宗教現象を解釈して，神秘性の構造を解明する際には，機能主義的な見方も有効であるが，むしろ象徴論的，構造造論アプローチの方が適切であるとして，本論文では主としこの視点に立って論を進めている。

4. こうした視点に立つ著者の宗教人類学の方法は，まず最初に対象とする宗教現象への被調査者の説明を丹念に集める。しかし彼らがそれについて説明しえない時は，他の民族誌にあげられている類似の宗教現象の意味をその脈絡を考慮したうえで検討し，エティクなレベルで解釈をこころみる。また被調査者が何らかの説明をした場合も，それをこうしたエティクな解釈でおぎなっていくというものである。このように著者の宗教人類学の研究では，特定社会の詳細な民族誌的研究を行なう視点と，異なる文化にまたがる比較研究を進める観点という相矛盾する立場を弁証法的に統合しようとする試みがなされている。すなわち今回副論文として提出された『宗教と世界観——文化人類学的考察』（九州大学出版会，1983）は著者による民族誌研究であり，本論文及び，参考論文『魔性の文化誌』（研究社，1976）は著者のいう弁証法的統合の所産なのである。

本論文はこうした新しい宗教人類学的視点に立って『神秘性の構造』を解明しようとした意欲的なこころみであるが，いささか概念のあいまいさが感じられる点がないでもない。それは著者が神秘性の重要な局面としてしばしばとりあげている「聖（または神聖）」と「穢れ」との対応関係である。例えば，著者はバリ島では「山の方」を神聖視し，「海の方」を不浄視すると記述している。ところが別の箇所では，「山側が聖に結びつき，海側が俗，穢れに結びつく」としている。さらに別の箇所では，浄と穢れの観念を対立させている。また上記のように聖と穢れを正反対のものとする一方で，穢れをおこす呪力は聖性をおびるとも記述している。こうした矛盾は宗教と非宗教の対立を示す聖と俗と，聖の内部に於ける対立である，浄・穢れ（不浄）を混同したことからおこったと考えられるのである。

このように若干の曖昧さが見られないでもないが，本論文は従来の宗教民族学者の研究が，概して宗教の起源，発生論，呪術・宗教論，アニミズム，アニマティズムなどの宗教形態論，儀礼論，構造・機能論に終始していたのに対して，宗教なるものを「神秘性」または，「聖性」として捕え，これまでの諸成果をふまえつつ，それが成立する条件やそれが，境界的，両義的，媒介的性格のものと見なされる文脈を，構造論や象徴論の視点，枠組によって明らかにし，宗教人類学の研究に新生面を切り開いたものとして高く評価されるものである。こうした点から本論文は請求された社会学博士の学位にふさわしいものと認定する次第である。

## 文学博士

乙 第1677号 萩原 滋

### 責任判断過程の分析

〔論文審査担当者〕

主査 慶應義塾大学文学部教授
社会学研究科委員，文学博士
佐藤方哉

副査 慶應義塾大学文学部教授，文学博士
佐野勝男

副査 慶應義塾大学新聞研究所新授
社会学研究科委員，Ph. D.
岩男寿美子

〔学力確認担当者〕

慶應義塾大学文学部教授
社会学研究科委員，文学博士
小谷津孝明

慶應義塾大学文学部教授，社会学研究科委員
井上坦